

不寛容性の個人差の研究(2)

稲越孝雄

A Study of Individual Difference in Intolerance (2)

Takao Inakoshi

1. 不寛容の個人差研究に関する発達の 視点

(1) 認知的世界において一貫性を保とうとする 傾向の発達の研究

前回の報告⁽¹⁾においては、短大生に対して個人の認知的空間の中から、自己概念の中の斉合性傾向、対人認知における感情認知の斉合性傾向、対人関係において、交わりの次元を一人の友人に集中化する傾向、対事象認知における斉合性の傾向について測定し、その相互関係から、“不一致に関する不寛容性”の構造を究明した。その結果、自己概念を含めて、他者との関係において斉合性を求める傾向の中には、非常に強い一貫性傾向がある事を見出した。しかし態度内構造の一貫性に関しては分化した構造がある事を見出した。

ここでの問題は、そのような構造の分化が、いつの時点から開始され、あるいは、いつの時点において成立するかにある。

認知的世界における斉合性に関する発達の研究も、近年、その成果が次第に示されて来ている。ただ、それが、自己概念の内部、対人関係の認知など個別の分野における現象として示される事が多く、個人差としての観点

から追究されているものは殆どないのが現状である。

ア. 自己概念内の一貫性に関する考察

前回の報告においては、自己概念 (Ps) と“母親から見た私” (Ms), Psと“父親から見た私” (Fs) とのへだたりをとりあげ、「向性」「強靱性」「誠実性」の3因子について比較をしたところ Ps-Msの強靱性以外は、非常に強い一貫性傾向がある事が示された。

自己概念内の一貫性については、理想自己と現実自己のへだたりの少なさが適応の指標として、これまで、とりあげられてきた。しかし、近年発達の観点が加味されて考察され、実証的研究が加えられる中で、この考え方が修正されて来ている。村田 (1981) は近年見出された傾向を次の3点にまとめている。

- ① 成人では、社会的成熟の水準が高い人は現実自己と理想自己との間の不一致の程度は大きく、この逆もまた事実である。
- ② 小学5年生ごろから5～6年間、現実自己と理想自己の不一致は、精神年齢ならびに生活年齢の増加とともに増加する。またこの不一致と知能指数 (IQ) との間には正の相関関係がある。
- ③ 一つのグループ内では、現実自己と理想

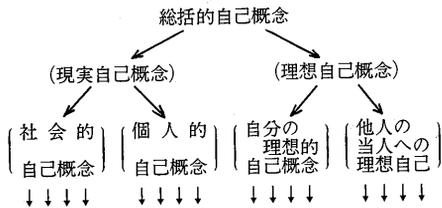
自己のあいだの不一致度の高い子どもは、他者から最高の社会的評価をうけ、最高の要求達成得点をえ、最高の学業達成を示している。

即ち、ある条件を限定すると、極端でない不一致はむしろ正常である事のあかしと考えられるに至って来ている。この間の事情をどのように考えたら良いのか。

問題を厳密に考えるに際して“自己概念”という概念自体を明確にしておく事が必要であろう。

ワイリー (Wylie, R 1968) ⁽³⁾ は、自己概念について図のような構造化を行っている。

図1 自己概念の構造



この図式によれば、従来適応の指標と考えられていたのは自己概念の2番目の水準のズレであったといえよう。これに対して前回の研究では、現実自己の下位に位置づけられている社会的自己概念(その中の Ms と Fs)と個人的自我概念との間のズレを問題にしている事になり、比較の水準が異なっている。

しかしこの問題を発達的に考察すると、下位の水準がより基本的には早期に形成される事が期待される。自己概念の形成過程は、一般的な表現をとれば、環境との交渉についての、自己の身体像・心理的能力についての知覚と学習の過程である。Piaget のいわゆる感覚運動的操作期以来、子どもは環境に働きかけ続ける。しかし働きかける子ども自身の“時間的に変化しない”ものとしての自分、“環境の事物とは独立した個体”としての自分を意識しなければ、その経験は自己概念と

して累積しない。それが身体像や名前を中心に形成されながら、自分の行為や存在が原因としておこった現象に対して、自ら感じる快や不快によって、自己概念の形成が開始されるであろう。また、これと並行してその行為の結果について、他者が下した賞讃や叱責が、自己概念と結びつき、その中に組み込まれてゆくであろう。しかし、このような強化理論的な枠組みでの自己概念の形成は、結果としては一貫性の形成を困難にする原因になるように思われる。身体的な快に基づく強化にせよ、他人の賞讃や、ほうびなどによる強化にせよ、それが環境によって与えられる限り、同一人の行為であっても、同じ結果や、同じような判断が与えられるとは限らないからである。

しかしながら現実には一貫性が存在する。前回の報告に沿って、具体的に述べれば、Ps-Ms, Ps-Fs の各次元にわたって、差の大きいものは常に差が大きく、差の小さいものは、常に差が小さい傾向が存在するのである。父親と母親とは異なった人格の所有者であるから、Ms, Fs は必ずしも一致しないと考えられる。しかるに Ps-Ms, Ps-Fs の相関が高いのは、被験者が Ms や Fs を推測する能力を全く持たないので、やむを得ず同一の判断を下したか、あるいは、親と自分の判断が不一致であることに耐えられる程度に個人差があるなどの理由による。しかし、前回の被験者が短大生であるから、第一の仮定は成立し難いように思われる。すると、ここではマーフィー (1947, P532) の言う“Urge to consistency”やレッキイ (Lecky, P1945) の言う“Striving for consistency”のなすわざと考えるのが妥当であろう。

イ. 社会的態度構造内の一貫性に関する考察

しかし、一貫性をあまりにも一般化すると、態度内構造内の一貫性の説明が困難になる。前回報告の一貫性の測度は、認知次元(ある態度対象が、特定の価値の達成にとってどの

程度の道具性があるか)と情緒次元(ある態度対象の好き、きらい)の一致度をとっている。これは、態度対象と本人の出合いの経験に左右されるので、対象の質と経験によって規定されるところが大きいと考えられる。しかし、この事はある意味では自己概念の考察の場合と同様であり、その意味から言うとこれにも、自己概念と同じ傾向の一貫性が期待されるのも当然であろう。しかし資料はそれと異なる事実を示した。即ち態度内構造の一貫性には何らかの異なる原理が働いている。だが、残念なことに態度形成について発達の追及した研究例が非常に少なく、今のところ、この現象に十分な説明を与える根拠になる研究は存在していない。

(2) 一般的な発達傾向の中での、一貫性傾向の検討

この問題を考える前提として、やや視野を広げて、人間の発達の中で、種々の領域で、一貫性を保とうとする事例を、発達の的に考察してみることにする。

人間の発達の中での一貫性保持傾向の根拠は一方にあっては、生物としての個体維持システムの側面に存在するとともに、他方は、社会の一員が、社会システムの中で、社会的影響を受けて育つ状況の中にもあると考えられる。

ア. 内的一貫性保持の生物学的側面

内的一貫性保持とは、生物個体が、環境の変化に対して、常に自分を安定した状態に保とうとする、いわゆるホメオスタシスの機能として考えられる。その中で、個体が自己と自己でないものを区別するメカニズムである「免疫反応機構」が、個体が自己という世界をそれ以外の物や、生物から守る基本的なシステムであろう。生体にとって生きてゆくのに不要な異物を白血球などの食細胞によって分解する「自然免疫」と、同種の生物細胞であっても自己と異なるものを排除する「獲得免疫機構」の両機能がこれを完うしている。

特に後者は、母親にとって“自己でない”細胞が自己の中に生存する事を可能にするとともに、自己の保存のためには、自己の中に侵入した抗原の中に抗体を増産させるという機能によって自己を守るという事を可能にしているという意味で、一生にわたって、個のシステムの中に、個体に属しない物質が混入する事を防いで内的一貫性を保つ機能を担っている。この機構は、いわば、先天的要素に加えて、自己が、どのような非自己と出会うかという後天的要素が加味されて効果が発揮される。心理学的な概念に置き換えると、広義の“記憶”の問題である。現段階では認知—記憶の世界において、自己と非自己の形成がどのように行なわれるかは、推論の域を出ないが、認知科学的な研究の発展の中で、記憶がどのように体制化されてゆくか、特に“新しい記憶と古い記憶がどのように関係しているか”“相互に矛盾する内容をどのように記憶するか”などの問題が明らかにされる中で、明らかにされる可能性を持っているであろう。

イ. 内的一貫性保持の社会的側面

内的一貫性保持の社会的側面は、子どもが生育する過程の中で社会化してゆく存在であるところが基本である。特にその中で言語学習の問題に一つの鍵があるように思われる、言語には辞書の意味の他に、情緒の意味が存在する。子どもの内的世界には快と不快が存在する。子ども環境が単一価値的な環境であれば、環境が望ましいとするものに対して、子どもに快的な情報が形成される。幼児が具体的事物に対するSD反応の中で、その事物の客観的特性とは関連の薄い項目に対しては“社会的望ましき”の方向で反応する事が多い⁽⁸⁾のはこの傾向の現われの一つであると思われる。

自己概念に関する一貫性と、態度構造内の一貫性についてこの点から考えれば、前者は同一の“自己”に対して与えられる評価であるとともに、自己の外以外にその判断の基準

を持ち難い点が、一貫性を社会的望ましさに従って（特に“理想自我”において）形式し易い方向性の原因として考えられる。

これに対して後者では、態度対象との出会いに際して、それが自分の感覚的世界の快不快と直接的に関わる体験があるとともに、周囲の世界から自分に与えられた間接的な情報が伴うところが異なり、それが認知的次元と情緒的な次元のズレを作り出す大きな原因として考えられる。

しかし、自我概念の形成過程のところで考察したような“Urge to consistency”や“striving for consistency”が存在するならば態度内構造の一貫性にも又、これが反映されるのではないかと考えられる。

このような問題意識の下に、“態度内構造の不一致に関する不寛容性”についての過去の研究結果を比較してみたい。

2. 態度内構造の不一致に対する不寛容性測定の発達的な比較

(1) 研究の目的

これまで考察して来たように、態度内構造において不一致をさけようとする傾向の個人差が明らかに存在する。しかし、発達的にみて、その傾向が強まるのか、弱まるのか、或いははじめから個人差であって、いつの時期にも避けようとする傾向の強い者、弱い者が同じ様に存在するのかすらも明らかになっていない。そこでとりあえず、このような方向性で測定された3種類の資料を比較する事によって、この方向性への示唆を求める。

(2) 研究の方法

① 対事象認知構造における斉合性の測定法

前回の報告において、測定Bとして記述されているが、その測定内容までは明らかにしていないので、今回は、それを中心にして再度記述する。各個人の斉合性の傾向は、態度対象に対する認知的次元の値 C_i と情緒的次元の値 A_i の相関係数として表わされる。(図2)

図2 個人 i の斉合性傾向算出の図式

⑦ 認知値の算出

態度対象	欲求項目(重要度)												C_{i1}		
	Y_1	Y_2	Y_3	Y_m	Y_{12}	V_1	V_2	V_3	V_m		V_{12}
X_1	I_{11}	I_{12}	I_{13}	I_{1m}	$I_{1,12}$								C_{i1}
X_2	I_{21}														⋮
X_3	I_{31}														⋮
⋮	⋮														⋮
X_1	I_{11}			I_{1m}	$I_{1,12}$								C_{i1}
⋮	⋮				⋮		⋮								⋮
X_{10}	$I_{10,1}$				$I_{10,m}$		$I_{10,12}$								$C_{i,10}$

(注) $I_{1,m}$ は態度対象 X_e の欲求項目 Y_m への道具性の程度を表わす。

① 情緒値の算出

	Z_1	Z_2	A_{i1}
X_1	l_{11}	l_{12}	A_{i1}
X_2			⋮
⋮			⋮
X_1	L_{11}	L_{12}	$A_{1,1}$
⋮			⋮
X_{10}	$L_{10,1}$	$L_{10,2}$	$A_{1,10}$

(注) $C_{i1} = \frac{10}{m} \sum_{m=1}^{10} (I_{1m} \times V_m) / 10$

$A_{i1} = \sum_{n=1}^2 Len / 2$

一貫性係数 $Con_1 = r_{C_i, A_i}$

⑦ 態度対象 X_i に対する個人 i の認知値 C_{i1} の測定

i) 欲求項目に対する重要性の測定

$Y_1 \sim Y_{12}$ に至る欲求項目の充足が、個人 i にとって、どの程度重要であるかを7段階尺度で判断を求める。(その結果が図の $v_1 \sim v_{12}$ である。又、欲求項目として、大学生の研究に用いられたものが付表1に示されている。)

ii) 各態度対象が、欲求項目充足に果たす道具性の測定

態度対象 $X_1 \sim X_{10}$ を選び (付表2に、同じく大学生用の研究に用いられたものが示されている。) それぞれが、欲求項目 $Y_1 \sim Y_{12}$ の充足にとって、どの程度役立つかについての認知的判断を求める。 $I_{11}, I_{12} \dots I_{1m} \dots I_{1,10}$ は態度対象 X_1 が、欲求項目 $Y_1, Y_2 \dots Y_m \dots Y_{12}$ の充足にどの程度役立つかについて、 i が認知的に判断した結果を示している。

iii) 各態度対象の認知値 C_{il} の算出

以上の結果から、個人 i について、態度項目ごとに $C_{i1} \ C_{i2} \dots C_{il} \dots C_{i10}$ を算出する、これは道具性の認知に、欲求充足の重要性を重みづけたもので、いわば、 $X_1 \sim X_{10}$ の態度対象が、彼自身の価値的世界の中で、どの程度重要なものと認知されているかを測定しているものと考えられる。この結果 $C_{i1} \dots C_{il} \dots C_{i10}$ が算出される。

④ 態度対象 X_l に対する個人 i の情緒値 A_{il} の測定、 $Z_1 Z_2$ はそれぞれ、「好き—きらい」「賛成—反対」に対する各個人の反応である。情緒値としてはこの平均をとる。

⑤ 斉合性係数 Con の算出

個人内の斉合性の程度は、このようにして得られた12の態度対象に対する認知値 $C_{i1} \dots C_{il} \dots C_{i10}$ と情緒値 $A_{i1} \dots A_{il} \dots A_{i10}$ の相関係数として算出される。 ($-1 \leq Con \leq +1$)

② 被験者 中学生142名、短大生 (38名いずれも過去に測定した結果)、大学生101名 (今回の測定)

(3) 結果

① 斉合性係数 Con の分布傾向

3つの被験者集団についての斉合性係数 Con (情緒値と認知値の間の Pearson の相関係数 r) の分布を比較してみると、先ず幾つかの点での共通性が見出せる、(表1、図3、4)

1. 大多数の被験者が正の相関値を持つこと (中学生90%, 短大生90%, 大学生74%)
2. 相関係数の範囲は、ほぼ $-0.60 \sim +0.90$ の範囲にわたること。
3. 値は異なるが、大多数 (ほぼ70%) を含む集団の左側に、相関値の低いグループの小さな山が見られる事。

また、これを前提としてその差異を見ると次の事が指摘できる。

1. 一貫性の分布傾向は、大学生は、短大生、中学生より、低い方向への偏りが大きい。
2. 低相関群の山は、中学生、短大生、大学生の順に低い方向へ移動している。

次に大学生と短大生の差の中には、当然、性別の差が含まれて来ているので、大学生の中の子 (N=56) と、短大生の分布を比較

図3 斉合性係数の分布 (%)

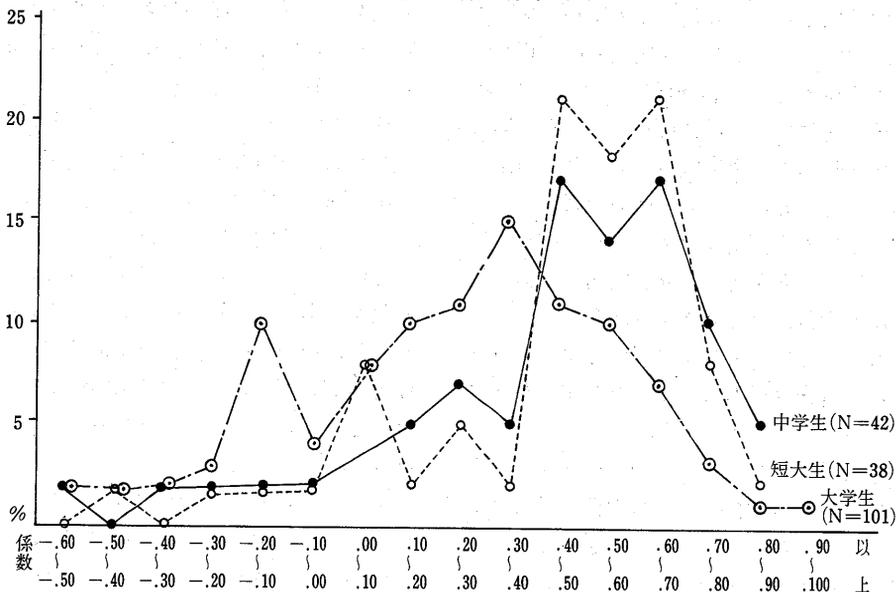


表1 斉合性係数の分布表 人数()内は%

> r ≥	中学生	短大生	大学生
～ 90			1 (.01)
90～ 80	2 (.05)	1 (.02)	1 (.01)
80～ 70	4 (.10)	3 (.08)	3 (.03)
70～ 60	7 (.17)	8 (.21)	7 (.07)
60～ 50	6 (.14)	7 (.18)	10 (.10)
50～ 40	7 (.17)	8 (.21)	11 (.11)
40～ 30	2 (.05)	1 (.02)	15 (.15)
30～ 20	3 (.07)	2 (.05)	11 (.11)
20～ 10	2 (.05)	1 (.02)	10 (.10)
10～ 00	4 (.10)	3 (.08)	8 (.08)
00～-10	1 (.02)	1 (.02)	4 (.04)
-10～-20	1 (.02)	1 (.02)	10 (.10)
-20～-30	1 (.02)	1 (.02)	3 (.03)
-30～-40	1 (.02)	0	2 (.02)
-40～-50	0	1 (.02)	2 (.02)
-50～-60	1 (.02)		2 (.02)
計	42	38	101

したものが図5である、これによれば、大学生の女子のみをとり出した時、更に低い方向へのズレが見出される。

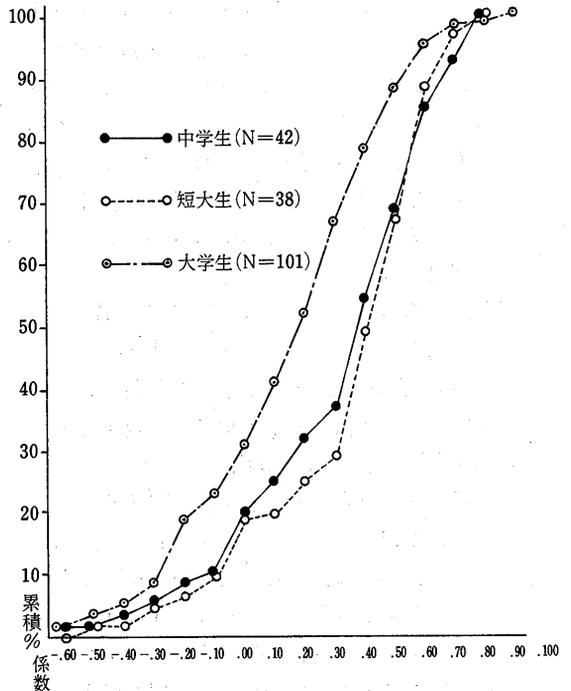
②性格検査(矢田部ギルフォード検査)の特性との関係

中学生及び大学生に対しては、並行して矢田部ギルフォード性格検査を実施しているので、斉合性係数が、質問紙検査の特性次元とどのように関係しているか、またそれが中学生と大学生とで、どのように異なるかを分析した。中学生においては9次元の反応傾向において高斉合性群と低斉合性群では、 X^2 検定結果、有意な差が示された。高斉合性群は、抑うつ性傾向では？反応が多く、気分の変化に関しても？反応が多く、客観的傾向が強く、協調的である。更に攻撃性傾向が少なく、活動性、のんきさも低く、社会的内向である傾向が低斉合群に比して見出された。

これに対して、大学生の反応では、高斉合性群と低斉合性群との間に有意な差は見出されなかった。

次に大学生のケースで、中位群15%をとり出して、高斉合性群、中斉合性群、低斉合性群について各特性次元毎に平均値を比較した(図6)この図で見出されるのは、これらの

図4 斉合性係数の累積比率曲線(累積%)



尺度の中の半数(6尺度)は平均値がH.M.L(或はL.M.H)の逆になって、しかもその3群間の差があまり大きくない事である、逆にM群が最も大きな(或は小さな)平均得点を示す尺度(例えば、客観性、協調性など)で群間の差が見出される事である。

(4) 考察

斉合性傾向の分布については、発達の的に斉合性が低い方向に動く可能性が示唆された。勿論今回の資料の中学生、短大生、大学生はそれぞれ、性別、知能などの点から等質の母集団からのサンプルとは考えられないので一般化する事にとまどいはあるが、年齢的に低い(又は知的に低い)段階にある場合に、態度内構造の不一致に関する耐性が低いという可能性が大いにあるとって良いのではなからうか。

次に質問紙法による性格検査の結果との比較であるが、中学生の場合に見出された高斉合性傾向の全体像は、「消極安定型」といわ

表2 中学生の各尺度別の反応の分布

(%)

尺度	群	×	△	○	χ^2	尺度	群	×	△	○	χ^2
D	H	42	30	28	10.44**	Ag	H	48.5	25.5	31	36.00***
	L	38.5	19.5	42			L	32	30	38	
C	H	52.5	26	21.5	6.12*	R	H	40	26	34	28.08***
	L	58	16	26			L	27.5	13.5	59	
I	H	43	38	19	5.28	G	H	23.5	50	26.5	20.28**
	L	55.5	21.5	23			L	34	27	39	
N	H	47.5	28.5	24	2.52	T	H	42	29.5	23.5	0.74
	L	48.5	22.5	29			L	34.5	30	35.5	
O	H	34	30	36	9.28**	A	H	31.5	37.5	31	14.04**
	L	44	18	38			L	34.5	31.5	34	
Co	H	45.5	26	28.5	9.48**	S	H	33.5	29	37.5	17.12**
	L	32	27	41			L	28	15.5	56.5	

(注1) H群, L群は各上位下位15%に該当する人数を選んでいる。

(注2) ×はD次元の反応に得点として加えられない反応, △は?反応で1点, ○は2点として点数化される反応である。

(注3) 本表は資料12より再録した。

表3 大学生の各尺度別の反応の分布

(%)

尺度	群	×	△	○	χ^2	尺度	群	×	△	○	χ^2
D	H	55.3	6.7	38	1.99	Ag	H	35.3	11.3	53.4	1.13
	L	47.3	8.7	44			L	35.3	15.3	49.4	
C	H	52.7	7.3	40	0.44	R	H	34.0	13.3	52.7	2.46
	L	54.7	8.6	36.7			L	38.7	8.0	53.3	
I	H	58.7	11.3	30	1.68	G	H	34.7	7.3	58.0	0.39
	L	64.0	7.3	28.7			L	31.3	7.3	61.4	
N	H	56	7.3	36.7	0.43	T	H	48.0	6.7	45.3	1.88
	L	59.3	6	34.7			L	42.7	10.7	46.6	
O	H	62.7	4	33.3	4.40	A	H	42.7	10.7	46.6	1.84
	L	54	9.3	36.7			L	35.3	10.7	54.0	
Co	H	67.3	10.7	22	2.19	S	H	25.3	8.0	66.7	0.31
	L	59.3	12	28.7			L	24.0	6.7	69.3	

(注1) H群, L群は各上位下位15%に相当する人数である。

(注2) ×, △, ○は各次元に対してそれぞれ0, 1, 2の得点を与える反応である。

れるC系統が顕著な類型に近い。ところが、この傾向は大学生では顕著ではなく、むしろ高斉合性、中斉合性、低斉合性に分けた時に中斉合性群の傾向の中に、それが示されている場合が多い事に注目しておきたい。これが発達の傾向性を示すのか、知的水準の問題を中心に考えた方が良いのかは、今後の検討課題である。

(大学生の資料の収集について、三浦博子さ

んの多大な協力を得た事を感謝致します)

参考・引用文献

1. 稻越孝雄「不寛容性の個人差の研究(1)」文教大学教育学部紀要17 1983
2. 村田孝次 児童心理学入門 pp 154~156 1981 培風館
3. Wylie,R. "The present Status of Self Theory" (in Borgatta,E & Lambert,W. "Handbook of Personality" 1968 Rand

図5 斉合性係数の分布の比較 大学生(女子)と短大生(女子)

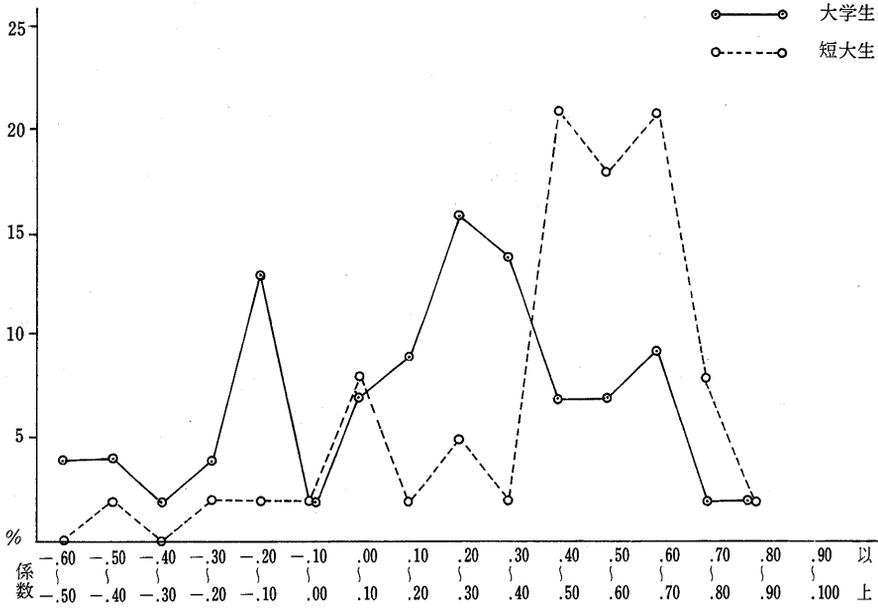
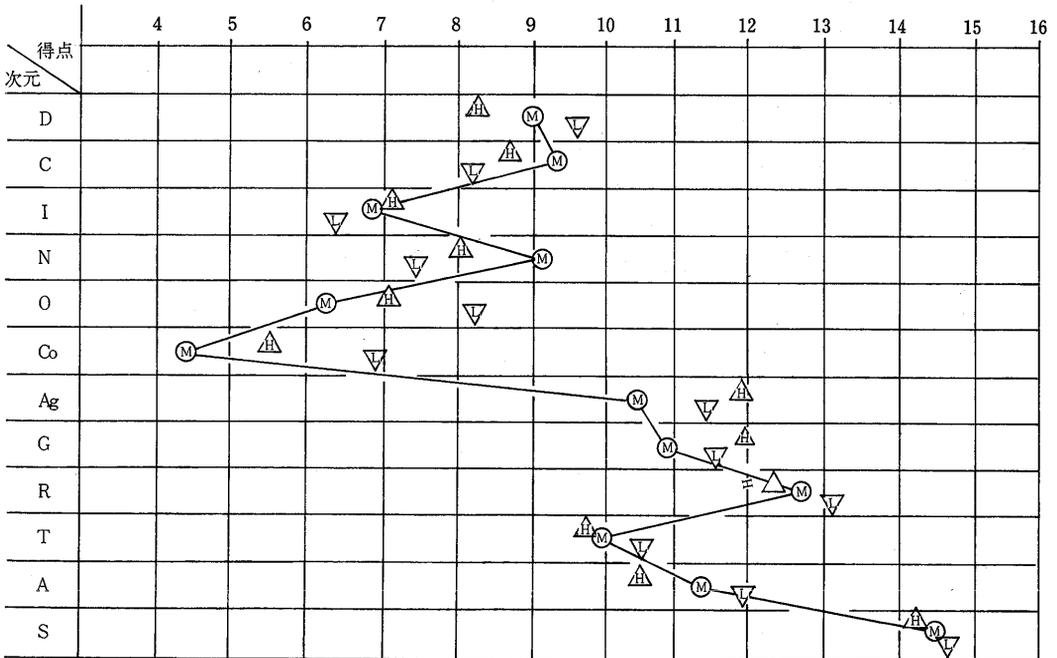


図6 斉合性係数のH.M.L群の比較 (Y・G性検の下位尺度毎)



McNally & Company,

4. Murphy, G. Personality : a biosocial approach to origins and structure New York : Harper, 1947
5. Lecky, P. Self consistency : a theory of personality, New York : Island Press 1945
6. 曾我部正博 個性はどのようにつくられるか (大沢, 鈴木 個性の生物学 1978 講談社 第3章)
7. 溝口文雄 「認知科学の課題と、人間の記憶への情報処理アプローチ」(渕一博編 認知科学への招待 1983 日本放送出版協会)
8. 稲越孝雄 「幼児における情緒的意味の形成」 立正女子大短大部保育論叢 4 1969
9. 稲越孝雄 1967 「態度内構造の不一致に関する不寛容の研究」 日本社会心理学第8回大会抄録
10. 稲越孝雄 1969 「交友関係・対人認知における個人差の研究——情緒認知次元の不一致に関する不寛容度との関係」 日本教育心理学会第11回大会論文集
11. 三輪博子 1982 「認知的不協和に関する一研究」 埼玉大学教育学部心理学科卒業論文
12. 稲越孝雄 1969 「認知—情緒次元での“不一致に関する不寛容度”との関係」 日本心理学会発表論文集

付表1 欲求項目リスト (大学生用)

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 人々が自分の集団に愛着をもつ2. 人々が他人の幸せのためにつくす3. 他人に尊敬される4. 人々が国を愛する5. すべての人々が同じ権利をもつ6. 人々とのくいちがいははっきり表現する7. 人々が道徳心をもつ8. 各人が自分のことを自分で決める9. すべての人々が豊かな生活をする10. 普通の人々と同じである11. 日本人が外国で高い評判をもつ12. 自分の意見や考えを秘密にしておくことができる |
|---|

注1. 重要度(V)の測定は<非常に満足>から<非常に不満>に至る7段階尺度で行なった。

注2. 各態度項目についての道具性(I)の測定は各態度項目が、欲求項目の達成にどの程度役立つかを<非常に役立つ>……<無関係>……<非常に役立つたない>の7段階尺度で測定した。

付表2 態度対象リスト (大学生用)

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 米・ソの対立が解決される2. 日本人がもっと信仰をもつ3. 見た物を見た通りに絵画に表わす4. 現在、科学で説明されていないことが説明できるようになる5. 男性に仕事より家庭を重視してもらう6. 多少は自然を破壊しても観光地が栄えて、地方の財政が豊かになり、中央依存が少なくなる7. 日本が中共との貿易をさかんにする8. 読んでいる小説は、内容が面白い9. 科学研究で、応用より基礎を重視する10. 自分と気があわない人も親しくする |
|--|